

擬ディオニュシオス・アレオパギテース『神名論』における
「神の名の解明」の内容と意義

早稲田大学文学研究科 寺島奈那

序論

6世紀にキリスト教世界に出現した『ディオニュシオス文書』の作者とされる擬ディオニュシオス・アレオパギテース（以下ディオニュシオス）は、「神はAでない」という仕方で神を表す「否定神学」を論じた思想家として知られている。しかし、否定神学は彼の議論の目的ではなく、手段の一つである。彼の思索の目的は、神への上昇であり、神との合一である。その達成のために、否定神学と共にもう一つ欠かせないものとして、「神はAである」と語る「肯定神学」がある。そしてこの肯定神学の方法を詳しく述べる著作が『神名論』であり、肯定の具体的方法として提示されるのが、「善」「存在」「知恵」や「一」などを神の名として論じる「神の名の解明（ἡ τῶν θεῶν ὀνομάτων ἀνάπτυξις）」である。

そこで本稿では、ディオニュシオスが「神の名の解明」の手段として、『神名論』の中で繰り返し用いる「讚美すること ὑμνεῖν」⁽¹⁾に注目することで、ディオニュシオスの合一を目的とした思想体系における「神の名の解明」の意義を明らかにする。これまでの研究で、「讚美」が肯定神学と否定神学との連関において必要とされると指摘され⁽²⁾、また「神の名」についても、神を名づけることが神化への契機となるものであることが指摘された⁽³⁾。しかし、「神の名の解明」の具体的な内容とその手法が「讚美」であることの意義についての考察はなされてこなかった。そのため本稿では、神の名の解明が否定と相補的である理由を、神の名の讚美の内容と構造に注目し明らかにする。

本稿では、まず第1節でディオニュシオスの記述に従って、肯定神学と否定神学の内容、および「神の名の解明」の内容を確認し、肯定と否定の両方において讚美が必要とされていることを確認する。第2節では、分有論による神の名の分類を確認する。第3節では、前節で明らかになった分類をふまえ、神の名の「讚美」の段階性について検討し、その特徴を明示する。

1. 否定神学と肯定神学の関係と神の名の解明

本節では、ディオニュシオスのテキストに即して、否定神学と肯定神学の内容と両者の関係を確認し、そこで「神の名の解明」が担う立場を確認する。

まず、ディオニュシオスが目的とする、神との合一についての記述を確認する。

あなた〔ティモテオス〕が神秘的観照について真剣な努力を払い、感覚と知性的活動の一切から離れ去るように私は祈ろう。そして感覚が感じ知性が悟った一切のもの、在るものと在らざるもののすべてを捨ててしまいなさい。そして可能な限り、存在と知識をすべて超えたものとの合一に向かって知を捨てた不知の形で高められるように。(MT, 997B)

つまり、知性と存在を越えた神との合一においては、知的活動の完全な放棄、すなわち認識論的な上昇と、自己の超脱、すなわち存在論的な上昇が求められている。肯定と否定は、第一に認識論的な上昇に関わるものである。「神はすべての欠如を越える原因として、すべての否定と肯定を越えてはるかにこれに先行するものである」(MT, 1000B)と述べられているように、神は根本的に否定的言明や肯定的言明を越えている。そのため、否定や肯定を行うだけでは神と合一することは出来ず、これらを否定し、越えていかなければならない⁽⁴⁾。このような否定の道の最後には、すべての感覚と知性とその主体である自己の存在は無用なものとなり、人は「完全な無言と不知」(MT, 1033B)の状態に至る⁽⁵⁾。しかし、知的活動の完全な放棄の前提として、十全に知性を働かせることが必要である。それが肯定神学と否定神学である。

まず、肯定神学と否定神学についてディオニュシオスが述べている箇所を確認する。

我々は神を万物の原因とみる場合には、存在者についてなされるすべての主張を、神についても定立し肯定しなければならない。しかし万物を越えるものとして神をみる場合には、むしろ神についてこれらすべての命題を否定しなければならない。(MT, 1000B)

肯定は、万物の原因である神に、その結果である被造物の名を、神の名として述語づけることを意味している。例えば被造物を「知性あるもの」と呼ぶ場合、その知性の原因である神も「知性あるもの」であり、そのように呼ぶことができる。対して否定は、万物の原因として結果を越えていることを示すために、肯定した名を否定するものである。被造物の知性の原因である神は、被造物より優れた知性をもつものであり、我々と同じ度合いで知性をも

つものではない。そのため、翻って「知性なきもの」と呼ぶことしかできない。これらの肯定と否定は、上昇と下降の動きでもって示される。

〔肯定とは〕反対の仕方でも否定を讃美しなければならないと私は考える。なぜなら肯定の場合には第一のものから始めて中間のものを通り、最低のものにまで降りながら肯定し定立していったのに対して、否定の場合には最低のものから出発して最高のものへと上昇しながら、すべてを否定していくからである。(MT, 1025B)

神に最も適した肯定から、神に不適切と思われる肯定へと段階を下降していくのが肯定神学であり、それと反対に、不適切なものの否定から、最も適したものの否定へと段階を上昇していくのが否定神学である⁽⁶⁾。そして、この肯定神学の具体的な内容が、存在者に述語付けられるすべての名前を神についても用いるというものである。これが「神の名の解明」であり、この方法を詳しく述べている著作が『神名論』である。

次に『神名論』のテキストに即して、神の名の解明として意図されていることを簡単に整理する。神の名の解明について、ディオニュシオスは「聖なる書⁽⁷⁾において我々に神にふさわしく開示されたこと以外には、敢えて語ったり考えたりしてはならない」としたうえで、「それぞれの知性に適した仕方でも、神聖なるものは開示され観照される」(DN, 588A)と述べている。これは第一に、聖なる書に書かれた名前、つまり神から啓示された名前を、人間知性に可能な限りで理解し、神に適切に述語づけることを意味している。「神の超越性」については、人間知性の及ばなさを把握するのみであったが、「神の原因性」は人間自らに可能な限りで知性を用いて探求することができ、またそうしなければならない。この原因としての神の名について、ディオニュシオスは以下のように述べている。

聖なる書を記した人々のすべての讃美の言葉は、神性原理の善によって働く発出に即して、これを頭わし讃美しながら、神の名をつくり整えていく。(DN, 589D)

ここで、「神の名の解明」の二つの特徴が確認される。第一の特徴は、神の名は発出に即して述べられるということである。つまり、「原因としての神の名」は、神の発出の結果である被造世界の階層構造に従って体系化されたものである。先に見た肯定神学の下降の動きは、発出のヒエラルキーを下降するこ

とを意味している⁽⁸⁾。第二の特徴は、神の名は「讚美」されるものだということである。聖書における「神の名の解明」は神の名の神聖視と讚美を伴うものであり、人間が神に関わるためのものである⁽⁹⁾。そして実際、聖書のなかに表れる神の名は人間に把握可能な仕方で神が人間に啓示したものであり⁽¹⁰⁾、人間からの応答として、讚美が求められるものである。

しかし、ディオニュシオスにおいて、神は名によって讚美されるだけではない。否定神学の方法について述べる中で、彼は「万物の否定によって、超越的なものを超越的に讚える」(*MT*, 1025A-B)ことで、合一へと向かうことができるとしている。つまり、神に対して存在者を否定することで、神が存在者を越えているというその超越性を讚美することができる⁽¹¹⁾。また、*De Andia* は、プロクロスからの影響を論じながら、否定と肯定を越えた、知性と存在を放棄した最終的な沈黙も、語り得ない神に対する讚美であると指摘している⁽¹²⁾。しかし、すべてを放棄して行う沈黙による讚美と、神の名を呼ぶことで行う讚美は、同じ内容をもっていると言えるだろうか。この点について、「神の名」の分類を検討することで、神の名の讚美の内容を明らかにする。

2. 分有論による神の名の分類

『神名論』の冒頭3章は、「神の名の解明」の方法論に充てられており、実際に神名について議論されるのは第4章以降である。本節では、『神名論』第2章で論じられる「統一された名前 τὰ ἡνωμένα ὀνόματα」と「区分された名前 τὰ διακεκριμένα ὀνόματα」に注目し、次節で讚美の仕方の段階を論じるための前提を示す。ディオニュシオスは、「聖なる書は或ることを統一的に、或ることを区分して伝えて」おり、「統一されたものを分割することも、区分されたものを混同することも許されない」と述べている(*DN*, 640A)。この記述は第一に、一なる神に関して三位一体を論じることへの批判に対する予防線となっている。しかし、むしろここで統一と区分ということを用いてディオニュシオスが表そうとしているのは、「分有」に由来する名前の分類である⁽¹³⁾。

その際、神の「統一された名前」は①「すべての剥奪によって超越を示すような名前」と②「原因を示すすべての名前」という二種類の仕方で述べられる(*DN*, 640B)。これは、あらゆる分有関係の第一義的な原因でありながら(②)、それ自体は分有関係を越えている(①)ということを示している。対して「区分された名前」は「神性原理のめぐみふかい発出と顕現」であり

(DN, 640D)、発出の結果として産出された被造物が神の名となることを表している⁽¹⁴⁾。そして発出を通じて我々に開示される名前は、「ただ分有によってのみ知られる」(DN, 645A)と述べられる。このように、統一と区分という分類は、発出の原因と結果の関係性に由来するものであり、これらは発出の仕組みを示す分有によって明らかにされる。

ここで、ディオニュシオスの分有論を理解するために、プロクロスの分有論を簡単に確認する⁽¹⁵⁾。プロクロスの発出論における、下位のものの善性の分有は、「分有されないもの」「分有されるもの」「分有するもの」の三分を用いて述べられる。そして「分有されるもの」として、一者の顕れであるヘナデス *ἐνάδες* を置き、これを神々と呼んだ⁽¹⁶⁾。プロクロスは一者の超越性を強調するために、一者を「分有されないもの」として発出の結果と直接関わらないものとし、代わりにヘナデスを、下位者に対して一性や善性を与え、かつ下位者から原因として把握されうるものとして措定した⁽¹⁷⁾。

ディオニュシオスは、プロクロスのギリシア的多神教を退けるために修正を加えながら、ヘナデスを廃し、その特徴を神の名に取り込んだと考えられている。まず、発出はヘナデスと言う媒介項を含まず、神にのみ由来するものであると修正した。そのため、プロクロスにおいて区別された一者すなわち「分有されないもの」と、ヘナデスすなわち「分有されるもの」は、ディオニュシオスにおいてどちらも神に対して述べられる⁽¹⁸⁾。つまり、ディオニュシオスにおいて第一原因である神は「分有されないもの」であり「分有されるもの」である^(図1)。ディオニュシオスは、統一／区分と分有の関係について以下のように述べている。

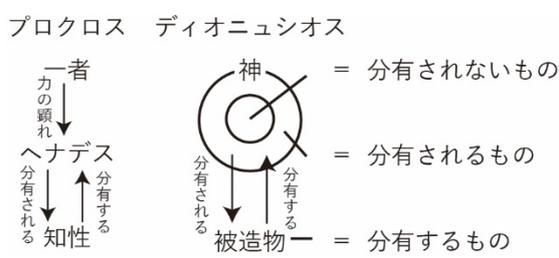


図1 プロクロスとディオニュシオス

の分有論

一方、神の区分に従って、無限に豊かなめぐみの分配が統一されている。(中略) このめぐみに従って、分有 (*ἡ μετοχή*) と分有するものども (*τὰ μετέχοντα*) とを通して、分有されぬ仕方 (*ἀμεθέκτως*) 分有されるものども (*τὰ μετεχόμενα*) が讃えられるのである。そして分有されるものどもとは、神の全体に共通であり一であり統一されたものである。(中略) しかし他方、万物の原因である神の分有されなさ (*ἀμεθεξία*) は、万物を越えている。(DN, 644A-B)

ここで、「統一された名前」に関する二種類の言及がなされている。すなわち、「分有されるもの」の統一と、「分有されない」超越的な統一である。前者は、神のめぐみふかい発出が、原因において統一されていることを表している。「分有されるもの」は、それが下位のものに分有されても、欠けたり減少したりすることなく、神において統一されている。これは、先に見た「統一された名前」の説明の一つである②「原因を示すすべての名前」を指していると考えられる。対して後者は①「すべての剥奪によって超越を示すような名前」という特徴を示している。「分有するものに関しては、いかなる仕方でも〔分有されないものと〕混合し交わることができない」(DN, 644C) のであり、「分有されるもの」を「分有するもの」が分有する場合でも、「分有されないもの」は完全に超越している。

このように、「統一された名前」は、「分有されるもの」と「分有されないもの」との関係において把握される名前である。すなわち、これは「分有されるもの」の統一であり、かつその統一の原因として分有関係を完全に超越した「一」という神の特徴を示すものである⁽¹⁹⁾。実際、ディオニュシオスは統一された名前について「万物の肯定であり否定であるもの、すべての肯定と否定を越えたもの」(DN, 641A)であると述べている。Louth が指摘するように、神について何かを肯定することにおいて、肯定神学が肯定神学たり得るならば、我々の肯定が、把握可能なものを越えたところに我々を導くという意味において、まさに肯定神学は否定神学的である⁽²⁰⁾。つまり、神の名についての議論の領域は、原因について論じる肯定神学だけを含むものではなく、超越について取り扱う否定神学の周縁にまで及ぶものであると考えられる。

対して、「区分された名前」に当たるものは「存在をつくる力、生命をつくる力、知恵をつくる力など、万物の原因である善が与えるすべてのめぐみ」(DN, 644A)であり、これは個々の「分有」という働き、すなわち「分有されるもの」の分有される働きである。つまり、「区分された名前」は多数の「分有するもの」と「分有されるもの」と

の関係において把握される名前である。「分有するもの」が、「分有されるもの」の力によって「分有されるもの」を分有し、存在者、生命のあるもの、知恵のあるものと成るがゆえに、我々は神を存在、生命、知恵と名付け、神がそのようなものであると類比的

ディオニュシオス

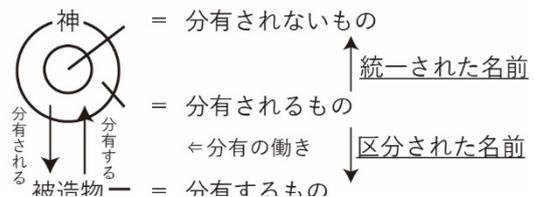


図 2 分有と統一／区分された名前の

関係

に知ることができる。実際、プロクロスは「すべて神的なものは（中略）〈分有するもの〉の側からは、〈語ることのできるもの〉であり、〈知ることのできるもの〉である」と述べており⁽²¹⁾、分有関係は、神についての人間の知の前提となっている。^(図2)

このように、「統一された名前」と「区分された名前」は、神・神の働き・被造物の分有関係に関連し、神の超越性と原因性とをそれぞれ固有な仕方で示すものである。これらは、図2の分有に関わる上下関係と同様「統一された名前」の肯定の次に「区分された名前」の肯定が行われる。すなわち、ディオニュシオスは肯定の順序について「すべての肯定を越えたものを肯定するには、神により類似したものから始めて、そこに肯定の基礎を置かねばならなかった」(MT, 1033C)と述べているところから、より神に適した「統一された名前」を踏まえて、より被造物に近い「区分された名前」の解明に進むことが想定されていると考えられる。

3. 神の名の讃美の構造

本節では、第2節で示された神の名の種類に関して、それぞれをどのような仕方で扱うのが適切か、どのような人間の状態が求められているのかを検討する。そのなかで、先の「区分された名前」と「統一された名前」のそれぞれがアプローチの手段として讃美を要求していることを示す。

第1節で確認したように、神の名は神と人間の関わりのために神によって示されたものである。そのため、神の名の讃美という人間の行為のためには、神からの働きかけとそれに対する人間の何らかの応答という、双方向の関わりが必要となっている。この二つの力の割合は、讃美の段階によって変わってくると考えられる。つまり、①神に対する人間知性の及ばなさを知る段階、②神の導きによって神を讃美する段階、③人間知性に為しうる限りで神の名前を秩序的に把握し讃美する段階である。この三段階は以下の記述に表れている。

知性と存在を越えた神性原理の秘密を、探究を停止した知性の聖なる畏敬において敬い、言われ得ないものを慎み深い沈黙において敬うとき、我々は聖なる書の中に〔ある〕我々を照らす光に向かって高められる。そしてそれらの光によって我々は、神性原理の讃美に向かって光によって導かれる。それらの光によって我々は世界を越えた仕方で照明され、聖なる讃美の言葉へと形成される。すなわち、それらの光

から我々にふさわしく与えられる光を見るように、すべての聖なる顕現の、善を与える原理を讃えるように。(DN, 589A-B)

「知性と存在を越えた神性原理の秘密を沈黙において敬う」のが①、「神性原理の讃美に向かって光によって導かれる」のが②、原理を讃える「聖なる讃美の言葉へと形成される」のが③である。①は、否定の道の到達点における「沈黙による讃美」と同様に、「知性」と「存在」を越えた神に対して、人間の知性と存在を停止することで敬意を表すものである。すなわち、客体として神を見ることなく、人間が主体として神に呼びかけるのでもなく、暗闇の中、沈黙において⁽²²⁾神を敬う必要がある。神の超越性とその否定性は、肯定の道の前提にもなっているため、一番初めに知性探求や解明を遂行しない状態で神の超越の不可知性を認めなければならない⁽²³⁾。この状態に至ってはじめて聖なる書を正しく解明できる状態になったといえる⁽²⁴⁾。つまり、神が人間自身の知性と存在を遥かに超えていることを自覚したうえで、②神の讃美へと導かれ、高められることができるのである。この段階は、肯定的に神性原理を讃美する段階である。つまり、神性原理はそもそも超越的であり、人間知性には知り得ないものであるが、神の光に導かれることによって讃美することが可能になる。そのため、①の段階から引き続き人間知性は停止したままであるが、讃美歌を歌い神に呼びかける主体、すなわち神に対峙する存在が必要になっていると考えられる。そのうえで③善を与える原理を讃えることができる。もちろんこの讃美も、神が万物の原因であるからこそ可能になるものであり、人間自身の働きが端緒になって行うものではない。しかし、人間知性は神の光が知性を照明する度合いに応じて、神を観照することができる⁽²⁵⁾。この神からの照明に応答して「我々はできる限りの力をつくして」(DN, 585B)、すなわち人間の全知性と全存在をかけて、神の名の解明に取り組まなければならないのである。

この讃美までの段階と、前章で確認した「統一された名前」と「区分された名前」の分類を合わせると以下のことが考えられる。まず、「統一された名前」は、②の段階で讃美されるものである。神の統一は人間知性によっては知り得ないものであり、我々はただ讃美できるのみである。プロクロスにおいて、人間は分有されざる一者ないし神々について知性によって知ることはできず、神働術によって近づくことしかできない⁽²⁶⁾。ディオニュシオスにおいても、分有される神の働きと分有されない神の間で開示される「統一された名前」は、その超越性ゆえに讃美という行為を必然的に要求する。というのも「統一された名前」の讃美自体は、知性的な神の名の理解によるもので

はなく、知り得ない神に対して、聖なる書に表された名を通して行われるからである。これは、神の名の解明の端緒として必要なものである。第2節で確認したように、神に対する肯定は神に最も適したものから始めなければならない。神によって明かされた、知り得ない超越的な「統一された名前」を讃美すること、すなわち知性を放棄して讃美を捧げることが神の名の解明の第一段階となる。

その上で③の段階へと進むことができ、ここで讃美されるのが「区分された名前」である。すなわち、「区分された名前」として明示化される、神の発出と創造の働きを、我々は人間に可能な限りで知性的能力を用いて解明することができる。「区分された名前」を知ることができるのは、「分有されるもの」としての神の働きを我々が分有しているからであり、その意味で知の根本的な原因は神にある。そして、もちろん我々が存在するのは、神が原因となって我々に存在を与えたからである。このような認識と存在の原因となる神の働きに対しては、人間の側の応答として、単にその原因性を理解するだけではなく知性と存在をもって讃美することが必要である。またプロクロスにおいて、神性を何らかの度合いで分有するものはなんでも、それぞれの仕方では讃美を示すと理解されており、そのゆえに動植物を神働術に用いることができる⁽²⁷⁾。ディオニュシオスにおいても同様に、神からのものを何らかの仕方では分有するものは、ある種の神の働きの表れであり、その存在自体が神の働きを讃えるものである。そのため我々はこれらを「区分された名前」として用いることで、被造世界すべてに行き渡る神の力を解明するだけではなく、神をその名で呼び讃えることができる。

このように、本稿第2節で確認した「統一された名前」と「区分された名前」は、讃美という取り扱いを必要とする理由は異なっているものの、どちらも讃美を要求するものである。

結論

本稿では「神の名の解明」について、新プラトン主義的な影響から神の名の分類を明らかにした。その中で示された「統一された名前」と「区分された名前」は、段階的に讃美されるものである。これらの讃美に通底するのは、神が万物の原因であり、かつ万物を超越するものである、という神の超越性と原因性の緊張関係である。この緊張は、否定神学にも共通しており、そのため我々は否定的言明によっても神を讃えなければならない。神に対する肯定と否定をすべて経たあと、讃美の前提として必要であった沈黙による神の

超越性への敬いは、より明確化され、沈黙による讃美となる。すなわち、可能な限り神の名について考察した上での神の超越性への意識は、初めの漠然とした神の超越性についての理解よりも神に近いものとなっている。そのうえで知性と存在を超脱し、沈黙のうちに神を讃美しながら、神と合一することができるのである。

このように、神の名が讃美されるものであることは、神の名の解明という行為自体に否定の契機が含まれており、かつまた否定を前提としていることを示している。同時に、否定による知性の放棄と沈黙による存在の放棄だけでは神に到達できないことをも含意している。沈黙による讃美は、声による讃美があつて初めて可能になるのである。

今回、神の名の讃美の必然性について、思弁的に検討しうる構造的な側面から検討したが、そもそも讃美は宗教性の強い実践的な行為である。そのため、本稿の中でもキリスト教的な概念、すなわち神の創造や神の恩寵的な導きが見受けられた。ディオニュシオスにおいて哲学的思弁と宗教的实践は相補的なものであり、一方のみでは「神の名の解明」が神との合一のための方策となることはなかつたであろう。このように、哲学的思弁と宗教的实践を一つの独自の体系として構築し、神への合一への道を開いたディオニュシオスの思想は、彼の源泉である新プラトン主義とキリスト教思想の新たな総合である。これはどちらかの伝統においてのみ意義をもつものではなく、それぞれの思想伝統における新たな展開と呼ぶことができるだろう。

注釈

- (1) 動詞形 ὑμνέω は『神名論』の中で 67 回用いられている。そのほか、『天上位階論』に 7 回、『教会位階論』に 25 回、『神秘神学』に 4 回、第 9 書簡に 3 回の用例がある。「讃美」それ自体の実践的側面は、教会での典礼において見られるものである。そのため、本稿では「讃美」の実践に至るまでの方法論を『神名論』において明らかにするものとする。
- (2) De Andia は、沈黙と賛歌、すなわち否定神学と肯定神学の二つの循環において、神の名を讃美しなければならないと述べている。De Andia, (2016), pp. 54-55、および De Andia, (1996), p.394 参照のこと。
- (3) 袴田, p. 140.

- (4) ディオニュシオスは、神に対する否定と、否定的言明と肯定的言明自体の否定を違う語で表している。Williams, (1999), pp. 167-169 参照のこと。
- (5) *MT*, 1033C 「逆に低い所から高みに座し給う者に向かって登ってゆくと、登高の度合いに従って言葉は収縮する。そして上り詰めた後で言葉は全く響きを失い、語り得ぬものと完全に合体してしまうだろう。」
- (6) *MT*, 1033C-D 参照。
- (7) ディオニュシオスの用いる「聖なる書 τὰ ἁγία λόγια」や λόγια、θεολόγια について、この書が『聖書』を意味しているのか『カルデア神託』を意味しているのか、という問題がある。本稿では、「聖なる書」と訳し、どちらかに確定させない形で扱うものとする。De Andia, (2016), pp. 66-70; p. 312, n. 2; p. 313, n. 5 参照のこと。
- (8) 『神名論』の議論の順番もこれに倣って、第7章まで発出の階層の上から順に並んでいる。『神名論』の各章の構成に関する議論については、Schäfer, (2006), p. 23-52 を参照のこと。
- (9) De Andia, (2016), pp. 47-49.
- (10) 『出エジプト記』 3, 14。ディオニュシオスが影響を受けたとされるシリアのエフライムは、讚美歌の解釈の中で多くの名を介した人間と神の関わりを論じている。そこでは、神の名について神が人間から借りた「譬喩的な名前」と、本来的に神に適しており、人間に転用して用いられる「完全な名前」があるとしている。この人間と神の相互的な「名の貸し借り」によって、名前を通じた神と人間の関わりが可能になっていると考えられる。Brock, (1992), p. 60 および Louth, (1989), pp. 79-81 参照のこと。
- (11) De Andia, (1996), p. 382.
- (12) De Andia, (1996), p. 395.
- (13) ディオニュシオスは三位一体論に関して、同一本質を示す名前は「統一された名前」であり、父、子、聖霊と表す際には「区分された名前」が用いられるとして、この二つの名前の区分を導入する。その後、分有論との関係で統一／区分を述べている。つまり、彼は二種類の統一／区別の関係を論じているが、ここで中心に取り扱おうとしているのは、発出と分有に関わる統一／区分である。De Andia, (1996), pp. 65-69 参照。『神名論』は三位一体論を論じることには主眼を置いておらず、第2章以降中心的に三位一体論が論じら

- れることはない。三位一体については、『神学概論』で詳述したとディオニュシオスは述べているが、『神学概論』も『象徴神学』と同様現存せず、架空の書であるとされている。*MT*, 1033Aを参照のこと。
- (14) デイオニュシオスにおいて、発出が創造の意味をもつことについては、*Roem*, (1993), pp. 138-139 および *O'Rourke*, (2005), pp. 215-224 参照のこと。
- (15) デイオニュシオスの分有論および三つ組み構造の、プロクロスへの依拠については、*Dillon*, (2014), pp.111-121 を参照のこと。
- (16) ヘナデス *ἐνάδες* とは *ἐνάς* の複数形であり、単一者などと訳される。プロクロスはヘナデスを神々とも呼んでおり、ギリシア神話の多数の神々をこの段階に充てている。一者を万物の起源とする一神教的な構造と、ギリシア宗教的な多神教の伝統との整合性を図るものであると考えられる。*Dodds*, (1963), pp.257-260 を参照のこと。
- (17) *ET*, prop. 6, 23, 24, 116, 123.
- (18) *Louth*, (1989), pp. 84-87.
- (19) 「一」という神名については、『神名論』第13章において詳しく述べられる。特に *DN*, 977C-980A を参照のこと。
- (20) *Louth*, (1981), p. 166.
- (21) *ET*, prop. 123.
- (22) *MT*, 997B を参照のこと。
- (23) *Louth*, (1981), p. 167.
- (24) デイオニュシオスは、自らの知識で神を知ることができると思いついでいる人や偶像崇拝を行う人に、神の啓示を聞かれてはならないとしている。*MT*, 1000A-B を参照のこと。
- (25) *DN*, 588A 「神性原理の言葉の光が自らを豊かに与えれば与えるほど、我々はそれに応じて上方を仰ぎ見ることができる」。
- (26) *ET*, prop. 123 および *Chlup*, p. 56, 60.
- (27) *Chlup*, pp. 127-131。万物が神を讃美することについては *De sacr*, pp. 148-149 参照。

参考文献一覧

【一次文献】

(1) ディオニュシオス

・慣例に則り、略記号、Migne版 (Migne, *Patrologia Graeca Tomus III*, Paris, 1857) の頁・行番号を記した。

・引用箇所は諸訳を参照し適宜表現を変更した。[]は執筆者の補足である。

《著作の略記号》

DN: De Divinis Nominibus

CH: De Coelesti Hierarchia

EH: De Ecclesiastica Hierarchia

MT: De Mystica Theologia

Ep: Epistulae

《校訂版》

Suchla, B. R. *Corpus Dionysiacum I* (DN), Berlin: De Gruyter, 1990.

Heil, G. and Ritter, A. M. *Corpus Dionysiacum II* (CH, EH, MT, Ep), Berlin: De Gruyter, 1991.

《諸訳》

英訳 : Luibheid, C. and Rorem, P. *Pseudo-Dionysius: The Complete Works*, London: Society for the Promotion of Christian Knowledge, 1987.

仏訳 : De Andia, Y. *Les Noms divins. Chapitres I-IV*, paris : Cerf, 2016.

De Andia, Y. *Les Noms divins. Chapitres V-XIII. La Théologie mystique*, paris : Cerf, 2016.

邦訳 : 熊田陽一郎訳「神名論」「神秘神学」『キリスト教神秘主義著作集』第1巻, 教文館, 1992.

(2) プロクロス

De sacr : De sacrificio

Catalogue des manuscrits alchimiques grecs, ed. Joseph Bidez et al., tome VI, Bruxelles: Lamertin, 1928, pp, 148-51.

ET: Elementatio theologica

Dodds, E. R. *The Elements of Theology*, Oxford: Oxford University Press, 1963.

邦訳：田之頭安彦訳「神学綱要」田中美知太郎編『世界の名著 15
プロティノス ポルピュリオス プロクロス』，中央公論社，
1980.

【二次文献】

- Brock, S. *The Luminous Eye. The Spiritual World Vision of Saint Ephrem the Syrian*, Michigan: Cistercian Publications Kalamazoo, 1992.
- Chlup, R. *Proclus: An Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press, 2012
- De Andia, Y. *Henosis : L'union à Dieu chez Denys l'Aréopagite*, Leiden : Brill, 1996.
- Dillon, J. M. “Dionysius the Areopagite,” . *Interpreting Proclus*, ed. Stephen Gersh, Cambridge: Cambridge University Press, 2014, pp.111–124.
- Louth, A. *The Origins of the Christian Mystical Tradition: From Plato to Denys*, Oxford: Oxford University Press, 1981. (水落健治訳『キリスト教神秘主義の源流：プラトンからディオニュシオスまで』，教文館，1988.)
- , *Denys the Areopagite*, London: Continuum, 1989.
- O'Rourke, F. *Pseudo-Dionysius and the Metaphysics of Aquinas*, Paris: University of Notre Dame Press, 2005.
- Perl, E. D. *Theophany: The Neoplatonic Philosophy of Dionysius the Areopagite*, New York: SUNY Press, 2007.
- Rorem, P. *Pseudo-Dionysius: A Commentary on the Texts and an Introduction to their Influence*, Oxford: Oxford University Press, 1993.
- Schäfer, C. *Philosophy of Dionysius the Areopagite: An Introduction to the Structure and the Content of the Treatise On the Divine Names*, Leiden: Brill, 2006.
- 袴田 渉「『名づけ』と神化——ディオニュシオス『神名論』をめぐって」
中世哲学会『中世思想研究』58, 2016, pp.130-140.